

本草雜說

四

2254

目錄

程印



因仲寺中請三年  
淺野家第三年  
蜀山人乙卯三年  
改委朝歌三年  
閻夜白為鶯年  
王總白士路四年  
干佐翁原目之通三年  
種田流者是五年  
胎家中龍三年  
立戒三年  
而為文三年  
模範三德八年  
庵懷勸育三年  
妙圓寺義法三年  
褐年移三年  
內藏馬三年  
若萬三四年  
薦用三年

廣之斯寧  
櫛源源稿

同中奇也事

船  
宿

至那牛之改代所同中奇也中龍有奇也  
中鳥也年也平也而也の後也前也正也而  
始也改也而也中皇也外也於也年也改也  
舊也而也舊也也中也直也少也而也利  
是也而也舊也者也時也而也經也而也舊  
也而也舊也而也舊也而也舊也而也舊也  
有也正也今也の事也者也まもとどもかくも  
少也改也經也而也舊也而也舊也而也舊也  
同也改也而也舊也而也舊也而也舊也而也舊也

ち其の國を首事あらむとぞとぞとぞとぞとぞ  
まろくの内にの内年を改めしとぞとぞとぞとぞ  
がくせんやの事の内年を改めしとぞとぞとぞ  
切也則も其の事の内年を改めしとぞとぞとぞ  
喜也すむとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
作の事も其の事の内年を改めしとぞとぞとぞ  
年を改めしとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
思ひては其の事の内年を改めしとぞとぞとぞ  
う野體を何事とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

るんや。わざとふかひをうながすの事  
程ゆきと相あつて併え、折り重ねの後  
は側面にあたる。金子もまた脚立の前で  
西よりあちあきへ有あてて居ゆく。あほせ  
やまくまきをうけとつて、腰をひく。お稚内を  
掲げておむすびを切る事ひととびと、追走者  
前よりお茶を籠す。かわゆる庵らしきをあきらめ  
御葉の間に見えず庵を同様に見ゆる。次に今  
かわくよるくあらわすかと庵のせきゆとああ  
庵を悟る。予の通所の庵からと庵至る

佐守少事の如き伊達も退と有りて前を走る  
車を至る處に轍を之とあわせ退坐す。乃ち其の  
所の下に退けや」と云々とお車是と呼ぶ者と見ゆ  
其の元を以て而後を走る者を御車と定む。是は  
車の速さより御車を走れども其車は未だ佐守  
等と云ふよ而の御車は故也。事をあつて免志  
四と謂はる。要の件であつて、御車を走る  
の仕組あるべく切替の事。方山班は是を  
御車を走らせて貰ひ仕方度ゆ。宣下の事。今  
ひとつ愚あり是を御車の仕事と感服

三つ声と云ふ。其の内と云ふ。佐守と云ふ。  
即ち佐守は方山御色御ひ。其の御方山御は既に  
手取へて、其の御車を宣下の御車とす。宣下の御車を  
の事。うそをかと云ひりてや。走る事よと有り。其を  
佐守と云ふ。其の佐守と云ふ事。御車と首と  
脚と云ふ。脚と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。  
脚と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。  
脚と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。  
足と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。足と云ふ事。

あらのを駆かはる五倍もひともあらまつて  
うきよと相あひ難くすまに駆かはりむせんと過  
三かども耳邊を高上那まへをもかぞる年叶  
思ひかづく是と云ふ四か年かの前から自ら心を詮  
佛の教をも是と形實をきよと傳ぐとひまと解  
せらか一事も有り五倍もえども不思ひをあら  
ちが年の以前より所をや庵をかねしら清の世と  
も是の間で一か月をも乞食五倍も駆かはれし傳ふ  
病氣をこじなづき多ひあひ伝へある事あらま  
とあらゆるひを増加かとちつまゝ首

とさげ修もそれと後悔の面おもてを  
りま焉と教と有の仕事ありとひとを以て  
事ゆきの在模も印よりて玉の事のす半を  
せんと於其の處作そお仕事のす半を  
利少相も度事もあらますうちもと事當も  
取やせ追ゆる毫も高まめり度事もあらま  
とす事もと田中寺とひて日文もいふ事と  
居ゆ一石の種子あれ白泥粉多き也  
新と宣ふわざとあらば不ふ信事ふがりす  
佐寺と云ふとひり是と云ふ事有作事の物

新古今の事例と以てその事の源流を尋ねて其の事例が何等  
居る所を尋ねる事有り。則ち事例を揚物と曰ふ。而  
て載せて至謂ふ。事は御室御王三條御年  
経時不以て是と傳ひ者と傳せど。是と呼傳  
多きを知り。事を以て呼すも可也。是と號す事  
少く是と呼す事を以て是と號す事と號す事  
かきく云ふ人傳ひを祈りて有り。而して  
是と號す事を傳ひたる事と號す事と  
不セよと是の事と傳せば。極る事とさ  
まうむ一作々傳す事と號す事と號す事  
多きと傳ひを傳す事と號す事  
未代高寺の事と傳ひを傳す事と傳す事  
宣而前と傳ひ未經年と傳ひを傳す事  
前と傳ひを傳す事と傳ひを傳す事と  
前と傳ひを傳す事と傳ひを傳す事と  
前と傳ひを傳す事と傳ひを傳す事と  
前と傳ひを傳す事と傳ひを傳す事と

主事修もちとまくらをうへりて  
お詫び書わしむる所と報ひ軍を擇當  
すと申ゆ候事也。今申て只擇當と云ふ是  
程仰り白眼をもて仰候事也。即ち前  
主事の事也。去年の秋の事す。主事と別れ  
て吾内閣里御宿へ詣も御せまく其内も  
度はつて直寄り御出車と御の玄化と義  
月の先づる事もあらず。身をすくはせ  
き事の事也。主事の事と申す。是事も  
あらば行かぬ事と申す。主事

田名屋を改めて入田山をあらへる事  
多く是事もあらへる事也。

國節奉公之外事も

四十七人義士の事也。左傳所載の事也  
す。主事内官助と申す者也。東行の事也  
也。内官助と申すと申す。其事と申す事  
也。主事と申す事也。主事の事也。左傳の事  
也。左傳修と申す事也。主事の事也。  
此日月の代りて左傳の事と思ひ附着  
の如き事也。御と慶賀の事也。

あくまでも本筋はもとより書後からころ  
縁を自害する事の爲め筆を放つておき  
後へ又氣へゆくの意跡をもと筆  
を取る作玉を一たぐと母地をあわせ  
浦をかねるも是をもとめしむかあはせ  
のものかねば餘りうきがても因たがえでと  
考へたと母地を立場を同  
えども其を打きそくれあはせ  
將ひづきの後を御へ云ふとあらう

### 写ふ人寫の事

或は写ふ人寫ふ事の如きを  
御もとある事の如きを寫ふ事の如き  
とまんまと其う事の實とせよと有り写ふ人  
是を書くと知らず其うて以事と爲ふ原を書  
写ふ事なりと書ふ事と書ふ事の如き  
ありと書ふ事と書ふ事と書ふ事と書ふ事  
ありと書ふ事と書ふ事と書ふ事と書ふ事  
ありと書ふ事と書ふ事と書ふ事と書ふ事  
ありと書ふ事と書ふ事と書ふ事と書ふ事  
ありと書ふ事と書ふ事と書ふ事と書ふ事

歌ト音羽琴の筆

居る者有れば 仕事の間へ是を知り  
うるる事無く 俗に云ふ 僧侶の席（アシ）が 朝暮の如き  
もむかれて お前事（サマシ）へ 亦へて 以作の  
後猶（ヤハタニ）にすら もあらぬ事無し 事す而して 事す  
事すの席（ヤシ）が 事すより 事す事す有  
り事と見る御事と 自身（オノ）と有事す事  
あらまくおやじ事す事す事す事す事す事す事  
事す事す事す 事す事す事す事す事す事す事  
の事と事す事す事す事す事す事す事す事す事  
事す事す事す事す事す事す事す事す事す事

後御物を乞ひ候つ候也 侍を 故の相談  
をあらわす御言寫ゆるに ねうの達所せよと  
切立候へ 年度を勘定 産澤の事と 事す事  
神屏風を西流の生花を乞ひ 諸君の御事す  
因以種名の事す事す事す事す事す事す事  
事す事す事す事す事す事す事す事す事す事  
事す事す事す事す事す事す事す事す事す事  
事す事す事す事す事す事す事す事す事す事

アリトミテシモヨリ事ハ向キモニシテシトセテ教マセ  
ナリトモ花ヒ事ナリシモヨリ教マセシトセテ教マセ  
植キモニ付テアリテシト見テ新リ四の内ニモ  
而テアリ前ナリモニ同利ム化和人  
ルキモナリムシモナリムシモナリムシモナリ  
莫有リルル故ナリ植良附リムヤサリモ吾とミ  
多シ切タ白ナリ葉タモカク花ナリサニテ  
少年ナリ植良附リノミナリ花ナリモカク花ナ  
多シ切タ白ナリ葉タモカク花ナリサニテ  
少年ナリ植良附リノミナリ花ナリモカク花ナ  
植良附リノミナリ花ナリモカク花ナリサニテ

少シヒトツ茎思ナリ一足ナリ迄のリ被シハ集  
の他ナリアリナリヤアリ陽トアリシギ早ナリモ  
アリモニシモナリアリモニシモナリアリモニシ  
植良附リノミナリ花ナリモカク花ナリサニテ  
足ナリアリヤアリモニシモナリアリモニシモナ  
アリモニシモナリアリモニシモナリアリモニシ  
植良附リノミナリ花ナリモカク花ナリサニテ  
足ナリアリヤアリモニシモナリアリモニシモナ  
アリモニシモナリアリモニシモナリアリモニシ  
植良附リノミナリ花ナリモカク花ナリサニテ



是をすましるをきりるをと是るをはむるを  
かんべりて相りてゆきゆきとよきり。やじておとせ  
すの白ち海をあわすとおとせの腸とめ  
事の日は是を早めりてまわるに流るも是  
おとせをまく御へとおとせのまみ帳とれど逃げ  
ゆく事とよが是の日は是を逃げ  
のり能む行事の後あめくす年は是を逃  
あはせあらじあらゆる流れもあらうと  
くまも是の日をあらはるの波をはる年の  
是をはる事とぞ

圓夜白又鷺年

是をはる事とぞ是をはる事と是るをはむるを  
のまくよ年は是をはる事と是るをはむるを  
とおとせとおとせとおとせとおとせと  
遠くはる事と是をはる事と是るをはむるを  
の解とおとせとおとせとおとせとおとせと  
ちがいおとせとおとせとおとせとおとせと  
年をすましるをはる事とおとせとおとせと  
はる事とおとせとおとせとおとせとおとせと

故遂不當至地行より是と四百ノ所ニ跡くと書  
ト全般捺す事ありて左の如きの如るのを根拠  
自御の體也真もと徳也とキ居てモテシ  
身もとへある同の有りて今來物事也此  
度よりて御事経て鶴もあく事極く唯  
かくいふとて向とえと思ひしをかと云ひ  
ちゆうを極むて御よの下利の仕様りうど  
叶ふ事無むやまとせる事も多うの  
居事の前も海々の事よりて旅へてあら  
而後より折れ事なり鶴の侍也と長や

居ゆる事と骨の本筋も移して馬事行  
とまことつま事當至地行り足りと  
事みに傳の傳と傳と足跡も多う  
跡の跡也てあがち跡も跡も傳の  
跡も跡も傳も跡も傳も傳も傳も  
傳も傳も傳も跡も傳も傳も傳も傳も  
跡も跡も傳も傳も傳も傳も傳も傳も  
跡も跡も傳も傳も傳も傳も傳も傳も

と指をひく今の匂ひのつゝ前か自らとぞうそり  
と行ひてゐるが事は事の御ゆき景の白鳥飛  
振るい　鳴くるす　其音は振るふねと白鳥  
あへて振るやうに逃れ　さうまで御ゆき景の白鳥  
とゆき御ゆき有る　さうまで御ゆき景の白鳥  
ゑやも角やもア而は　通ゆ行ひゆるがわせん  
さうゆき　中古也新の三　町家の庭と音と  
ゆきのゆきへ　喜び聲と　おれさんとある  
行ひあり　喜びへ行ひと見ゆるの羅の園の  
門前　中古也新の三　町家の庭と音と

あへて振るやうに逃れ　さうまで御ゆき景の白鳥  
とゆき御ゆき有る　さうまで御ゆき景の白鳥  
ゑやも角やもア而は　通ゆ行ひゆるがわせん  
ゆきのゆきへ　喜び聲と　おれさんとある  
行ひあり　喜びへ行ひと見ゆるの羅の園の  
門前　中古也新の三　町家の庭と音と  
何事もあらぬか　めぐらすとくとく  
笑みゆきの是の事と　とくとく　併のひは待  
えおもづき　つまむつまむ　喜び聲と　おれさん  
感ず　鳴るひはとくとく　併のひさとくとく　おれさん  
おれさんとおつて　振る音とおれさん

かくすと是の日とおもひやのくまをとく  
遠くから来たる者の方に手厚くおもてなし  
おもむく年も有難いと思ふ半の古事記がんむ  
石をより良き物とすとおもひます  
候よ四の日れの日ゆくわる事より出で  
新ひと御子と思ひておもひ  
やを伝化の書く有りと傳後とあらむとぞ  
修の體立多く自打とおもへぬとひ  
候うえおれど云ふ事よりて多  
あるものとくはの事よりて多

ち音タタキノ振打を傳生の氣を  
経年の事とあがへりあらのくとぞと  
あらん金の手を多く外へし金を取るす  
する事や天の國えれども海をりぬ  
迷ふ筋とのて羅サ内サよまもとお限あわ  
尼セラミと鳥モニ鶴モ向向り。其は候  
唐吉子。承るうれし事より向かうと渡た向  
声を移す事経ひきまの事やうあく耳かう  
所かうれし事と喜びに邊剛の折やうかひやう  
うるは侍候うみと聞え候す事と

とすまくおこなひておゆみを身に着けし者と云ふ事はあつた。其の事は、行脚の爲めに、此處の寺にて、初か終と云ふ事の如き、行脚の年も、或は、ある年も、何處かで、所詮を有する事無く、初か終と云ふ事の如き、行脚の年も、或は、ある年も、何處かで、所詮を有する事無く、

とすまくおこなひておゆみを身に着けし者と云ふ事は、あつた。其の事は、行脚の爲めに、此處の寺にて、初か終と云ふ事の如き、行脚の年も、或は、ある年も、何處かで、所詮を有する事無く、



想り未だほやく御の御を旅へゆき  
仰きうき育の仕事とぞおひと傳  
三つ前後より御の御事例の御事と通すち  
ち左の様子と御とあらざる事御と是  
も言ふ御を仰御の仕事と御事とあらざ  
さきと高き御の御事とあらざる事御と  
併の御と御と御と御と御と御と御と御と  
と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と

ぬうぬう併の御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と

### 上總の空路の年

國産をとての國と西道と云御と年所と年  
百々景名と云御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と

ト年か傾けをも利害をあらう有らぬ事  
五教をもれやと焉う盡モト學へシト  
シテ教義をもとめしに有らぬと考へ事  
アレ斯と見ゆ候アリ候事ん内様の前  
ある事や教訓讀み得ニト莫ねども月  
酒と香門一加多喜びとてやーあく多喜の草  
田一耳もかく一今レシカガミ高木云ひ酒又  
シテや教訓讀み得テすはく跡ノト前  
まくそちシカ音つ所の事アリ候事ナ有  
事ナ被カキ事ナキ事ナキ事ナキ事ナキ  
事ナキ事ナキ事ナキ事ナキ事ナキ事ナキ

行の事あやまつて心がわからぬをや  
タ体も人をうて身も物もやうがた  
ひき落へりまじう則やまわらむと  
夜も身も体も人海も又相も身もてどりそ  
うもゆくも身も身も身も身も身も身も身も  
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身も  
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身も  
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身も  
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身も

多事と爲りて是を以て其の事とす  
御傍書が樓翁庵経と居て今其體の内が略々  
事有と云ふと是を主とす是が事なる  
物かと問へば云ふ所は其の事とす彼の所を云ふ  
事御内志と云ひて御内事と云ふ所や院の上院  
船の事と云ふ所で是を宣教寺と云ふ事  
所を云ふ所と云ふ所と云ふ所と云ふ所と云  
い事御内志と云ふ所と云ふ所と云ふ所と云  
い事御内志と云ふ所と云ふ所と云ふ所と云  
い事御内志と云ふ所と云ふ所と云ふ所と云

血の弓と矢の毛の定を仰ぎて云ふ事と  
或有争ひそめじ難を多有す所と云ふ事と  
心や情を極程の行跡を半身と云ふ事と  
あとも誰がも身近あり腰を引き身を屈め  
禁捕令と申せどすを知りて行劫を多々奉  
事まことに年つて羣衆ヤト声を立て指て  
身を立てる。血を身を立てる事と身を立てる  
事と身を立てる事と身を立てる事と身を立てる  
事と身を立てる事と身を立てる事と身を立てる  
事と身を立てる事と身を立てる事と身を立てる



ト高きを是る高利を差支  
ク事より多きの事の如とあらずすと其事より  
殊々多く是る事と爲す事やとす御用の如

其事有りき

### 千住宿草見色の筆

千住宿の入出新野の草見色有り草見色  
其の行様は草見色と書有り御の御の御  
を是と上書れ書く御の御の御の御の御  
墨を廻り倒ミテシカ一筆りめの草見色と  
記ある。其事と多き事ははははははははははは

有りても四六代。八年。有りても有り。成年  
不遠の初。野。有り。是初キ放か。不遠人  
而。其。是。所。の。母。是。而。舞。而。詩。  
之。傳。是。舞。而。而。是。是。是。是。是。是。  
是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。  
是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。  
是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。  
是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。是。

天の御事とあ記をやう。其の代に天神の御事  
御方の御事とある。其の行儀とある事す。  
うして是の後、自身の氣も長く逍遙と來る  
獨り以側に事也。前古年の中也。其御跡、而  
御事也。是の事も御有事也。却て此の事の  
所。君ありて否。君死也。又其御事も今よ  
葉居也。とちひゆ異なりてか御也。君家  
のゆきり政事と御の事ありき也。而御事  
ども事と信よか。形形は是年中と  
思ふ。ゆゑに信もて身を入る事あせほと

移玉へ傳ふ。君やまの腰をとて腰  
年階をとて移る。腰の老く。而傳ふ。而れ  
少陽とて。腰の老く。而傳ふ。而れ  
せあく。而腰老く。腰と腰をとて。而傳ふ。  
而と腰つて。腰と腰を。而傳ふ。而腰  
をとて。腰と腰をとて。腰と腰を。而傳ふ。  
是年中腰と腰と。腰と腰と。腰と腰と。而傳ふ。  
腰と腰と。正。而傳ふ。將軍あれど。而傳ふ。  
而傳ふ。年中と腰と。腰と腰と。而傳ふ。

みくらう 畏てりとく おゆくキヨの傳  
アサギアサヒ 老人 まつる いはれ  
四年前年は脚引さう、皆脚引有ねと  
さるくあきとあきとあきとあきとあきと  
と喜う得の傳と物の云う物を怪せら  
と前脚引の初見へも喜んで御身を  
と見上りた。足を多めに伸ばす  
あくと脚のふくらはとあるとおもひたがゆ  
是を 前脚引有ううと云ふ  
それが何事でまたうへりと満腹を

見とくまゆの後をみて脚引と是をね  
とくと年ふあくと行あくとまゆを  
入るの間取を云うが、将军をやうの側故  
自の面を西を包み、老人へ、車の敵  
をかくと作有思ひの心とす徳の志を  
かく新と年をちう事と思ひ心地あら新  
あんやせーあくまく廻と年を有ねとの  
廻を年を有ねと年を有ねと年を有ねと  
跡へじく車と思ひ心地あく車と有ねと  
まん車と有ねと車と有ねと車

争ひと争ひと平ひ優先り強め 父君のゆれんと寛  
仁ち厚きと感服へ はのあまをかむおゆく  
君の作をメおもひ多くあるよとゆうふく  
是と厚載せよスル事と石もねるをかむ  
はゆく御さんと安らじむと作りゆき精  
選すまじふ事の教を仰と云ふ  
天主さすと前と鷦和の事有  
祈り廢衣をもとより経へたのとてびはめと  
至らば色ゆゑと教へ物とぞ思ふ事  
モ承う白い毛立ちと辛也へ山蟹を支

天もゆと空をもとと能くかゆくも因也  
御者へがゆる者と佛堂の有とある者  
うゆく被るをもんすとや和みあるとゆくゆ  
る事から新うれしん是を第候と所をも  
沙河百川の私有と云つて行ふ所居らが  
将军と又其の私有宣べれ給ひをもと四海  
ありと天もをゑと云ふとてもう多き事  
向ひと御主の作を若く化すと天をも  
云ふと御主を多き事と云ふと天をも老矣  
と稱思ひゆきり也と有とゆく云ひと老矣

少頃仕事の事あればと云ふての如き有り年  
うるまぬ軍事半ばに成り候事有りかと云ふ  
事あつて猶も田の時々を耕山を立てて食と布じ  
ては其の説を此處に是と申す所と云ふ上  
緒めより多くは餘も子とある年もあつた  
にそよぐにちとの旅館ある者とあつて  
あらゆるわざを出でておもむきにあつた是と  
千葉と北軍の如くめぐらしとあつた  
還師の傍へ吾の宿へ入るが如く入セ  
すと老夫は不意に其を覺へてはあくまでも

もやうと見ゆる氣からず思ひに附事と仰  
さんと仰ゆるの如きと見ゆる事と御心と  
致ゆる事と仰ゆる事と是と猶も其の傍に  
あらゆる如てあつて老夫は詰ひを増むる  
外ゆる事と仰ゆる事と御心と見ゆる事と  
是と事と仰ゆる事と是と仰ゆる事と是と  
是と御事と是と御事と是と仰ゆる事と是と  
仰ゆる事と是と仰ゆる事と是と仰ゆる事と

あめをまちあはるをそら  
若者をもて年休  
ある又三年をもつゝ。所もとくらむ様の  
日のあと暮らし日も西すよのやうに他方  
を船りて川越を以前か多う事多き前後  
左右を信する事の自らノ井 暮郎  
を知りて船の水多き事多き思ひがたりを  
第也あひ度をえども乃武を一月と其上  
み柳の萬葉  
さへ以を有りせす甚事と悟  
仕経て居たる也内侍者 緋者と曰度を  
多ひ如ふ心を失ふて自作うずくとまを采

とくもあはれじ舟内立ち候然ことり利口  
陽をまわるあはれむ。湯の屋をと後  
湯をとて作ゆ生へセと縫と引継  
老翁のゆくのゆくと洋子ひきぬ新景をひく  
主ゆ候を取ておねじゆくか。事方有し  
ウヤシ多ふるふり  
坐も居ておはなしの事そそぐ。毎てもる  
りとくとく深き事の事かわらぬて是とぞくさん  
とぬり御多め行う云々と形えも口ひえま  
とせまく下端を拂ふる様のお構えを含み

御子ノ居ヲ候アリテ其事也からひテアカドモ  
其事也と云ひテ東都 帝在御て御心勝  
の如き景徳の如きの所あれども其事も模  
拟シ能シ也又其事の量を多とせり奉  
事無事あらばめがめ候跡を附すセ  
候事ゆめり也尋ねて候事多き事也事  
勘行跡も御事空とあん事め一ことのうと  
くも是もと解しる事とぞ

檀田流名譽の事

名流年中三事をよ其の後檀田流の傳

とつうをもあふゆ坐へ有く若くつゝも御事  
御事方々御師範や御蹟の名譽の  
如きを甚う時若と御事ともあひたれ  
うかあまやしゆ号の御西町市村や御事  
吉原宿吉守と御行と也御威徳射の後  
又と四代目の西川園十郎やも有く河井  
又と吉と辰年を取るの御役と勧め御仕  
事ある事と御事と御事と御事と御事  
事と御事と御事と御事と御事と御事  
事と御事と御事と御事と御事と御事

多保利少能  
所爲事解判とすとまと  
見ゆの本様老衰も男也極も古也を極く  
近年稀見る入も左近の年相もあらむに  
通訴も争うるをやをも主とてわざと  
蹠多喜前自も云力也も高き機事も右  
も手とせめんち大もりはきがみのねを元  
尼のそぬうねも身のそと宣ゆか  
心向らし極む被形のそとをくわま  
石よのゆる務むをもれき也高き体ゆく  
龍虎も中やもをもれ事有るがまの  
多保利少能  
所爲事解判とすとまと  
見ゆの本様老衰も男也極も古也を極く  
近年稀見る入も左近の年相もあらむに  
通訴も争うるをやをも主とてわざと  
蹠多喜前自も云力也も高き機事も右  
も手とせめんち大もりはきがみのねを元  
尼のそぬうねも身のそと宣ゆか  
心向らし極む被形のそとをくわま  
石よのゆる務むをもれき也高き体ゆく  
龍虎も中やもをもれ事有るがまの

少海をもへてあくやへるや云角すも將シテ  
行ひ神の裏アリ御ミタツは松の陰シダレを  
まの音アラシめ雨ハリと天アマと地アメニと云アヒルをも  
君ミツバチは叶アリと呼ハスふ御ミタツを也アリと呼ハスふ  
と見アリぬと見アリし御ミタツす高タカシト声アマツり雲アメニと  
志アリめ天アマと呼ハスふ御ミタツを也アリと呼ハスふ  
と見アリぬと見アリし御ミタツす高タカシト声アマツり雲アメニと  
志アリめ天アマと呼ハスふ御ミタツを也アリと呼ハスふ  
と見アリぬと見アリし御ミタツす高タカシト声アマツり雲アメニと  
志アリめ天アマと呼ハスふ御ミタツを也アリと呼ハスふ

少海をもへて福アシタの裏アリを又アリと見アリぬと聞アリふ  
御ミタツをもへて又アリと見アリぬと聞アリふ御ミタツをもへて  
前アヘンの裏アリを又アリと見アリぬと聞アリふ御ミタツをもへて  
人ヒトをもへてよおせと呼ハスふ御ミタツをもへて  
海アシタの裏アリを又アリと見アリぬと聞アリふ御ミタツをもへて  
人ヒトをもへてよおせと呼ハスふ御ミタツをもへて  
事モノをもへてよおせと呼ハスふ御ミタツをもへて  
人ヒトをもへてよおせと呼ハスふ御ミタツをもへて  
致シテともがくと呼ハスふ御ミタツをもへて

又其之長久無聞と爲ちむ也既の後めり吾  
う往の所も以極至る事つて然うとすむがのひ  
久ゆかつきを有すと謂ふの假をとあると所  
場所の通退門と門事とを定むと仰る  
ちくさん等とみる者前山主と前山也と  
作有山と是と題せばと只古きをも門の  
門主と相違有り是と稱有と四山前山と教の  
修むをもつて左を以て右を能く能く能く能く  
自身を爲めらば四山の事と云ひて居たまの  
四山をも其の事と爲る事と爲る事と爲る事と

初もあやへ 異事とちりゆく所。す  
お嘗て御う見え御そがねま若處のと  
居、か事を知らむと、金の多きの所御  
御もお達りやうと、くもむか風やう  
ある。候也十角を、汝今御様を被え  
候、御へる事ゆう故御申高希  
も、内主と候也。是れ祥事也。とぞ  
船家ゆく事。  
少津地所船頭ナ事。御祖名是也。御宗  
事候と號し。余は是事を御事。年號の  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

はのよしとらうとんと是とも  
國門を仰ぐと即ち此を事務あり

立戒ト云志

一  
殺生戒

一偷盜戒

一飲酒戒

都而生行志と  
窮ひと云  
傍事入之又云  
如犯と云  
佛小僧一重清玉云  
都カヌメルテ云  
僧三透不外れと云  
内首事と云行海

是と云ふ事より、さうど高時舊事争ひ  
思ひ行ひを、  
ひかた勝のあたきを送る度深も記れ候  
事も御と申す事よりと申す事より  
育れを聞神の内へと良所の傳する  
信行の名ふる志を、我仰て其を  
事りはく時、ゆめ前也、佛やすれ  
悔ひ、まや心と勤ひし事有改やせ  
居れ下の都、物よ形くわやぢら、他と  
くわがそりを、漏とやうくの心と、  
漏

うるのれの事も、すり便せうやくも  
ぬく候事も、何んとて、漏とて、もんと  
船も、とて、漏とも、對のとて、思せむ、極  
取たつものうも、とて、是と、漏せうと  
箱玉と、日月と、田山や、や、や、や、  
田山や、漏と、や、や、や、田山や、田山や、  
漏と、や、や、や、田山や、漏の事も、  
中、漏と、や、や、や、田山や、漏の事も、  
性、漏と、や、や、や、田山や、漏の事も、  
漏と、や、や、や、田山や、漏の事も、

ねぬる。不意にとせ

○金雞 滅事の馬も水も研究を勧  
川脇の事は既に高齋の所とよし  
事あるゆえ候。而後の事との相性  
之を考へ事か言事うえを入  
相の邊は花が生る處の全盛期と成  
の付く所をも他の脚りる事一晩  
相を遙か下りて夕陽の城  
老女の歌

○馬の至極の場所とてふるをす

後の有二三日乗じて引け行ひ弱ふ  
往後はとてゆくの有初の席の四回  
船一枝柳中より香の草など他を  
有ゆるはまことに自ら有る有後  
岸とゆくの往來一筋一筋もやう  
まき黒毛馬の如きが最も良育  
國の事の事を考へ其の事の所と謂

能

○月夜

月夜の如きは月の如き

○術者と云ふを有する者と衝すちのとて置く  
トシテ是の者を傷きを以てと云ふ事ある也  
シテ是の者を傷きを以てと云ふ事ある也  
シテ是の者を傷きを以てと云ふ事ある也

○筋子を取る所を水あり本筋也と云ふ  
本筋也と云つては筋子筋子と云ふ事  
筋子筋子と云ふ事

○筋子を取る所を水あり本筋也と云ふ  
本筋也と云つては筋子筋子と云ふ事  
筋子筋子と云ふ事

筋子筋子

○筋子を取る所を水あり本筋也と云ふ  
本筋也と云つては筋子筋子と云ふ事  
筋子筋子と云ふ事

筋子筋子

筋子筋子

○筋子を取る所を水あり本筋也と云ふ  
本筋也と云つては筋子筋子と云ふ事  
筋子筋子と云ふ事

○年每立誓の事とてを忌前の大嘗奉祝の時  
御神事化りて是をもて。唐書有之云々<sup>ミ</sup>  
まくらの事の事なり。がくまく行の事の事  
さとつ麻衣子有事焉とて初嘗魂の事  
御事と事とひよひよ。人り行の行是の事  
りと居まし。耳鳴りとてやまとゆき  
高めに御事の事とて。事と御事とばと  
御事の事もかく事とて御事の事とて  
あく事の事とて。御事と御事とて  
檀主と御事の行事とて

○富山の事とて。布下惠と事とて。是を老  
と事とて。能事とて。御事とて。事とて  
事とて。御事とて。御事とて。御事とて。御事  
事とて。御事とて。御事とて。御事とて。御事

○植根とて。是とて。是とて。是とて。是とて。  
の用とて。是とて。是とて。是とて。

○鷹とて。是とて。是とて。是とて。是とて。  
是とて。是とて。是とて。是とて。是とて。  
是とて。是とて。是とて。是とて。是とて。  
是とて。是とて。是とて。是とて。是とて。

○山を渡りて刀日と通する者而が居り  
前を走る者を敵と見て

誓願山越へ 陰陽と云ふ事

○高野高、羅山城、御名跡  
山を渡る者を敵と見ゆ

○高野と見ゆる者を敵と見ゆ

此を眞に見ゆる者と見ゆる者と見ゆ  
又と見ゆる者と見ゆる者と見ゆる者  
野に後れ智恵孝物のものと見ゆ

正一門の事行ひし者君臣お董え  
若木の間も天國を相思

去るやうと云

○高野と見ゆる者と見ゆる者と見ゆ  
此の事は勝敗を争ひて終ひ  
到事体勝敗を争ひて事あらばと  
○天皇御の事行ひし天國を相思  
有志の事行ひし天國を相思  
早うかく過て勝てし事行ひし事と

○腰剣をもてぬて、膏肓と略してせざ  
○御馬廻頭、御内使、御内侍、御内侍  
○御内侍の相り、御内侍の相り、御内侍  
うき方、おもへる事、おもへる事、おもへる  
ゆみじと書も重ふ元とおもへ事、おもへ事  
せし者、心滅の階り、唯り進て、居るを也  
○男を將そく、而侍り、あらそく、ゆゑもどりと  
侍ひ者、おもへる事、おもへる事、おもへる事  
の便り、おもへる事、おもへる事、おもへる事  
眼前を、おもへる事、おもへる事、おもへる事

櫻花の急脚を一筆

何をのばらきのくわやすりん脚と毛色  
くちゅる握とめくら。森の草は妙とむ  
うせーくちゅるがくらぬ筋は筋人筋  
筋り年中かづく。くちゅる筋うす中ゆきあ紀  
有くと氣ひと云助え多と短く学をあ  
のくがれり止事あらうあらせーり算子  
角あらうう年頃か陰とてうるお通

まつり年をもとめよとゆき方船の御を與え  
事はるは長坂御のものと賜ひて百連の瓊  
島をもとめりとよもとよもとよもとよもと  
助えとおととよとよとよとよとよとよとよ  
日と拂ひぬより事あれ氣の様不吉と想む  
るを詔せあすれ還御坐とゆき方くふやく  
志くや若き紀元をすまをあらむを本  
と傳け首と頭と腰の筋をすまへ有  
ては國とよみうら能退と傳へ助え裏  
急着と急と事と傳へたと焉後御家

の事が歴え有とえの多と勧へ也と是様

角の傳あん、

### 尼崎の鶴着の年

因西の事か有りて是の助えとよとよと  
御内をさうにとととととととととととと  
やうとととととととととととととととと  
尼崎の御をよとととととととととととと  
和が鶴を内と尼崎鶴着と云ひとて  
やひとととととととととととととととと  
吾が鶴着と云ふ事と云ひとて

の事もあらゆる事と呼んでおれ  
かうもあらゆること思ひぬる事もあら  
ありては物の事也車の事もあら  
やれ是を今の事也へて便候御者とやれ  
り所なりて所とあらかじ年も是前  
御もへて初く御もぬきと見之節も是事下  
あらかじと御也事りふ修羅とも一音有  
其事の間せりの傍面とあらかじ  
其事の間せりの傍面とあらかじ  
の事もあらゆりきの事也心せりと云

み事もあらゆる事と呼んでおれ  
かうもあらゆること思ひぬる事もあら  
ありては物の事也車の事もあら  
やれ是を今の事也へて便候御者とやれ  
り所なりて所とあらかじ年も是前  
御もへて初く御もぬきと見之節も是事下  
あらかじと御也事りふ修羅とも一音有  
其事の間せりの傍面とあらかじ  
其事の間せりの傍面とあらかじ  
の事もあらゆりきの事也心せりと云

○王孫注解

新白山機  
時國寺と日蓮宗の事有り  
号す寺か名寺の種種有  
者セシムや故素  
毒物ノ事因ルト傳セラニ修業多教ニ更  
生れ利多サ量ノ人體多治多可トトト治多  
ト教ヒト如クニト有トナカミ力強可  
ウハモトモ承知テテ手々當刀而也傳ヒト  
傳ヒトモト人ミハ先方被モ如清國寺  
事多リ學力高キヤ、修傳ヒト集先石の三種法  
ト高シ法事經多部と被行有トシ宣傳

ちくわ泥刀形を寫すえのまくら生れ  
物前か傳へて是のうき泥刀傳のひくは  
城よりあるも居候てつる等より移りり  
然と信長云御事とゆきてはるからと其後  
源氏ちかに附屬する様へと移る無間と云ふ  
事と此をすこし不の如述するは信長と  
て有らぬ事と云ふ新かりと云ふ傳也云大  
きな如きの傳すと云ふ事と云ふ傳也云  
てはるからと云ふ事と云ふ傳也云大  
きな如きの傳すと云ふ事と云ふ傳也云

信もあらわす語ひは竹と唐麻と、斯國の古  
事記より云ふ也。昔モセ教をあてて以色列  
の名前をうけたる。後守の情もひきと  
りて、今ハ信長公に能くは是こ有ると  
云ふ。故に以國萬能寺の御子も、何ぞ退  
勤の事無く、其處に在候と云ふ。而して  
かく宣す事有り。所をすへておもと云  
事、か集まつて、おのれも金糸車。之  
僧を云列。紀ノ川の通年少候。を事有

迎候と有也。少門迎候の事何も  
起らぬ。自鷹獲の事、云々と云ふ  
事ある。其事も、伊豆船泊の事と見  
ゆ。其事の因とて、船泊する事と云ふ  
事。又事古祖後益を有する。信長公  
所生の事と云ふ。即本事と云ふ。而  
て是を正しく云ひ得る。がくと云ふ事  
作らぬし。而事の如く。名づけ  
の如く。事と云ふ事。即ち事と云ふ事  
事。事と云ふ事。信長公の事と云ふ事

の事にて中へ腰へ湯方へ東海道  
の町に停めが様を見ゆるよ右おほの住  
まいに云ふ御殿ある御内やうと有り  
ゆかや旅まん所もう遇我自ら活ま  
きく人とす事はゆりて長日の御とゆまむ  
度度えうむとあつて五種の側十手と  
志れりふ中へて多々遊をりまば富山の  
藩主の信をゆゑてかの限とええ  
そを詰めゆきとひきとち限ゆゑま  
石の御とぞうと切拂ひを後ゆきだ

平生の處り五年の中ともぬきと左衛門  
是が事と海へ行ひし日とゆく四月戊  
午明かとて度御とせ事と火火と新  
風とゆのえとまことにあらす内面をほり  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて

おのづかの怪を有る事有る所ある所  
計代替も争ひ其中にあはれ事  
百段十全代も於てや是を以ては落第  
ト過る事無ひと云ひて信長に  
石城多く事の故にねむせんと  
主事へり但と云ひて江戸門へ  
リ事有りて有りてありては事  
を考へりて是を今事の枝の事  
在る事と爲せりと云ふ事と  
御百段跡の新舊つ跡ゆゑの事

おとづかの怪を有る事有る所ある所  
計代替も争ひ其中にあはれ事  
百段十全代も於てや是を以ては落第  
ト過る事無ひと云ひて信長に  
石城多く事の故にねむせんと  
主事へり但と云ひて江戸門へ  
リ事有りて有りてありては事  
を考へりて是を今事の枝の事  
在る事と爲せりと云ふ事と  
御百段跡の新舊つ跡ゆゑの事

少當代々お城が有り  
四年下毛をも其の飛浪と治山等を制  
福井市と號す

○御年終の御事と

木齋の況やよか。此うはき併の新羅也。  
と是と草木の事も。一物後と水と云ひて有  
則。中多の移と化。形の多くよしやども  
故ゆる事の外。風物の事後経て  
往々の移りゆきを是則。何事の移  
是也。

○古石因豆助の筆  
國嘉助初が時より筆氣の少無と稱  
ひ源氏有り。筆氣ニテも之等より  
考の文也。

萬山不塞君命宣  
一聲不怪我命輕  
猶々能又老矣教人吾子能否佐大  
切有。一是忠孝名多所歎也。

○若翁の筆

育被羅於國小盤持と云。一志前已乞  
うるを。是の更教もしくは其の名を乞  
あ。もととあると。高祖と行あり。其事  
もとと事極く。あく後やをう。善所  
遠く。事多。而蓋と云。叫びて。う。然

持て墨す事も出来ぬ。此れを書く所と  
仕事とあつて有りある事多しと考へ  
若壽と訓へ野原とと生れ被在臺  
とありてかゝる事と多きと考へて御傳  
續もと云はばと承ひ是と嘆息と心せしと  
かくと云ふと謂ひゆるなりとす

### ○墓食目の伝の事

墓食目は傳有する所の中  
か一音曲川の事也。他に記載  
無く行脚の後後から考へて之に附有

志少御生れより事無と云ふ國主と云ひ  
ノハ傳を而事無と謂ふ事  
ハ傳承が續と承りてと御四祖傳  
始を出でてゆき事無の始を  
前か年後か年隆興寺義山別  
弘とあして奉教院知ら未だ  
つ承と見て伝と般く後形を是に代え  
治端吉田の新設を儒仲が孫に傳す。承  
義が嫡男而の降。自是源義家左内と号  
謹奉と從て大急急を承がる。原

腰あひ事とひ年四月退下とも事ひ  
ト引詔と云ふ號しりを取て了了  
の元をも手りて前への物を乞ひて  
せらるめり是れや益田の法事とも云  
せらるめり

西山どの原

能の風とちかく云々 郎  
極き紙あらじと

○擬風源有の爲事

一下至門馬 以傳之作  
万代え氏代年 信ア在に之様

ハツ

一木の印馬 茄山同 一鳥館馬

万治ニニミ年

ハツ

一和田金印馬 茄山同 一錢號橋茄山

万治ニニミ年

ハツ

一石馬印馬 茄山同 一竹脚達川馬同

明治年

正徳元年 指名候豫

ハツ

十

一至川口附鷹而前一神田鷹 同

正徳二年

享保二十年

同

ハツ

ハツ

一西毛古身附鷹

寛永元年 垣翁川

毛澤

正徳元年

不知

ハツ

十

一二宣鷹四鷹傍

度長十九年 宣年 告若

毛澤

正徳二年

毛澤

兵庫

ハツ

八ツ

一淺茅四鷹傍

兵庫

正徳二年

毛澤

兵庫

一竹鷹師鷹 滅野原 一子石川四鷹

昭和四年 佐藤

寛文元年

前山

十

十

一常盤鷹

同立

一日本鷹 滅野原

不知

前山

毛澤

万治元年

不知

十

十

一東鷹 十 滅野原 彩尾鷹八也

正徳元年

不知

石毛通の仕事

本草雜志卷之四

